

人を育てること

笹澤 克代

ここ半年ばかり、テレビや新聞に小中学生の自殺が幾例も報道されていて悲しい。それもほとんどが「いじめ」が原因である。さっきまで元気でいた子どもが、瞬間に物言わぬ物体と化してしまうことは、誰にも驚きであり、にわかには信じがたいことである。両親をはじめ、ご親族の悲しみや怒りが、わがことのように胸に突き刺さる。私にも2人の息子を育てた経験があり、子どものいとしさや大事さは何にも変えがたいものである。身近な大人たちはどうして止められなかったのか。また、子どもは「死ぬ」という行為を何故かくも簡単に選んでしまったのか。学校の校長をはじめ関係者は、いじめの実態をほとんどが認めようとせず、彼らにも子どもがいるであろうに、その表情は、子どもが亡くなったということに対する悲しさや悔しさよりも、己の立場の心配や戸惑いを隠しえないようにおもえる。

古今東西、人の命よりも大切なものがあつたらうか。誰にとってもかけがえのないものであり、だからこそ科学や医学の研究が、世界中でこぞって行われ、健康で少しでも命が永らえるように、多くの人達が命がけで研究しているのではないか。その努力は並大抵のものではなく、我が家の92歳になる母もその恩恵をこうむっており、大変有難く感謝の気持ちで頭の下がる思いである。今こそ私たち大人は子どもたちに、命がどれだけ大切なものを、そして、本能的に守らねばならないものであることを教えなければならない。

私は、かつて高校で教鞭をとっていたが、教育の現場では1点にしのぎを削っている。クラス全員の1人1人が、少しでも高得点を取るよう日々強いている。私の専門は数学であったが、生徒は内容など理解しようとはせず、点につながることだけを覚えようとする。高校くらいの数学は意味など理解しなくても、テクニックだけで解けてしまうものが多いことも事実である。

「先生、そこテストに出るんですか」

「入試に出やすいところはどこですか」

こんな質問は毎日のことであった。私も過去のデータを見て入試に関することを中心にしていた。生徒の点数を上げることは楽しかったし、第一志望の大学に入れることは、私にとっても喜びであった。また、そうすることで私に対する周りの評価が上がっていったのも否定できない。保護者もかなり信頼してくれた。私は次第に自信と自負が身についていた。これが大きな錯覚であるということに気がつかなかった。当時、毎日が充実してい

たし、自分の職業は天職のように思えた。ついてこられない生徒は、目の端に捉えつつも、必要以上には目や手をかけることは、あまりなかった。とにかく効率優先であった。当然彼らは授業中は発言することもなく、ただ黒板を写すだけの作業をしていることになる。しかし、ある時、こんなことがあった。

「先生、そこはどうしてそうなるのですか」

その質問に答えようとしたまさにそのとき

「お前なんか、わかんないんだから、聞いても無駄だろ」

とたんに教室の中は爆笑の渦で、その生徒は赤くなってうつむいてしまった。

また、できる生徒はクラスの実権を握り、しかし、私の前では優等生を演じていることにも気付きはじめた。クラスの中は生徒対生徒ではなく、できる子とできない子の構図になっていった。できる生徒の発言力は大きい。

また、何か失敗をしたときのこと

「先生、内申書には書かないでくださいね」

と、本気で手を合わせる生徒もいた。

授業中の私語を注意すると

「俺、そこもうわかっているから、できるから大丈夫」

と、のたまう。

そんなことをくりかえすうち、私の中で何かが少しずつたまっていった。授業が虚しいのだ。私は何をしているのだらうと自問した。優秀なロボットをつくっているようであった。ロボットには人間性が欠けている。優しさも労わりの気持ちもない。協調性もないし、生きる喜びも感じないようだ。教員になって10年が過ぎようとしていた。

学校を移ったこともあり、私はこの頃よりわかる授業をこころがけていった。何故なら、今までひっそりとしていた、できない生徒たちが、徒党を組んで授業妨害を始めたからである。校内暴力が始まったころであった。生徒にわかるような言葉を選び、内容もできるだけ生徒の日常からとりあげる工夫をした。彼らを制しなければ授業が成り立たない状況であった。数学という非日常の分野をできうる限り具体化し、生徒の頭の中ではなく、生徒自身の経験に結びつけていった。誰でもが何の遠慮も羞恥心もなく発言できるような授業を心がけた。場に合わない発言もていねいにすくい、授業につなげる努力をした。そんなことを繰り返しているうちに、全員目が私のほうを向いてきた。何かを聴こうとしている目であった。身が震えるほどの感動であった。

不思議なことに、クラス全体の成績は、今までと比べそう大きく下がることはなかった。また、ゆっくりの進め方で、教科書の問いや過去問などに手をつけなくても、できる生徒は自分でやるようになり、わからないところは質問してくるのだ。彼らは自分で考え、友達とわからないところを協力し始めた。驚いたことに、わからない生徒には教えてやっているのだ。とてもいい雰囲気です、私は今までとは違った喜びを感じていた。同年齢の生徒同士の言葉は、私の説明よりもよく伝わるらしい。子どもは皆、学ぶことが基本的に好きなのであるということを知った。1人1人に目を向けることが、教師にとっては必要であることに気付いた。教師はクラスの生徒全員のものであり、授業もまた然りである。わかる喜びを知ったときの生徒を見るのは嬉しい。生徒の表情も穏やかで、お互いを信頼しきっている。

「先生、うちのお父さんがね」

と、家族の話を持ちかけたりもする。そんな話題を時にはクラス全員にふったり、あるいは授業の中にもりこんだりしてみる。

「うちもおんなじ」

「うちの親はさー」

とか、結構ほのぼのとする。

生徒どうしだけでなく、それぞれの家族の様子を知ることで、生徒は自分の家庭と比較したり、自分の将来像を描いたりしながら、自分を主観的に見たり客観的にみたりできるようである。

近所付き合いが少なくなっている今、そしてさらにほとんどが核家族である今、子どもは自分の家しか知らないし、あるいはそれさえも知ろうとしていないかもしれない。こうして、学校という集団の中で、たくさんの人の生活の様子を知ることは、彼らにとって必要と思われる。友達の集団の中で、自分を見つめたり、ひいてはじぶんの家族を観察するチャンスになるとと思われる。成長過程で人との接触が極端に少ない現在の子どもたちにとって、学校という集団の中で自分の役割を認識したり、自分をどう表現したらよいのかを学ぶことは必要でかつ大切なことである。

ケータイブームで、子どもたちは、間接的にしか人と接したがらない。それでは、表情も見えないし、細かなニュアンスも伝わらない。お互いの息遣いも感じられない。嫌われるのを極端に恐れる子どもたちは、ケータイで相手の機嫌をそこねないように、あいまいに応答する。だから、いつになっても真に親しくなれない。彼らの友情はまさに「昨日の

友は今日の敵」状態で、日々揺れ動いている。

教師は、自分の経験を生かし、自信を持って生徒としっかり向き合うべきである。机の上の学問だけでなく、人間本来の五感を研ぎ澄まし、人が生きていくにはまず何が大切かを、見極める力を教師自身が身につけるべきである。これからも「いじめ」はなくならないし、どんな集団にも存在すると思う。いじめの根本は、考え方の相違からくるのであるから、少数の意見も尊重するよう、幼い時から躰けるべきである。これだけは徹底してやらないといけない。そして、自己と他者の違いを認め合うことの大切さと必要さを体に植え付けるべきである。

群馬は学力の低い県だそうであるが、そんなことは恥ずかしいことでもなんでもないことである。子どもを自殺に追いやることのほうが数倍恥ずかしいことである。形に表れるからといって、全員の子どもたちに点を取ることを強要したりしてはならない。勉強が苦手な人も嫌いな人もいるのである。それより、生まれてきてよかった、努力は楽しい、知ること学ぶことは喜びであり、人を愛することは幸せ、と、どの子もそう思えるような毎日が過ごせるよう、教師も含めて我々大人が努力を惜しんではならない。

人が、社会の中で生きるためには、何が必要で、自分はそのために何ができるのか、何をしなければならぬのか、どうやったら人と和合できるのか、多勢の中でも自分を見失うことなく、しっかり捉えられるよう教えていかねばならない。人は誰も1人では生きられないし、1人1人違って、それぞれ違うことができ、社会は成り立つのであるということ、子ども1人1人に認識させなければならない。